平 成 30 年 度　自 己 評 価 表　（中間評価）

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標（学校ビジョン）	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切にして知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の重点目標	1　基礎・基本の定着と学力の向上 2　基本的生活習慣の確立 3　地域連携と特色ある教育活動 4　進路意識の向上と進路保障 5　コミュニケーション能力の向上

		年度当初			評価結果（中間）		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
1 基礎・基本の定着と学力の向上	□全体的な基礎学力の向上と学習意欲の向上 （進路・教務）	・D3の生徒は、年度当初に比べ減少し、2年続けて50%以下の目標を達成した。	・指標として、基礎力診断テスト(1,2年生)におけるD3の生徒が45%を切り、上位層の成績が向上し、全体の学力が伸びる。	・基礎力診断テストを毎学期始めに実施し、基礎学力の定着を図りその状況を検証する。 ・朝学習・基礎学力テストを検証し、基礎学力の定着を図り、表彰制度を設けるなど実施方法の改善に努める。	・基礎力診断テストの結果は、 1年生　4月　38/85(44.7%)、8月　38/83(45.8%) 2年生　4月　27/74(36.5%)、8月　22/74(30.1%)であった。目標をおおむね到達している。D3の数自体は、減少傾向にあり、この状況を維持できればと考える。 ・朝学習、基礎学力テストは計画通り実施している。基礎学力の定着については基礎力診断テストで判断すると2年生では成果が見られるが、1年生では停滞気味である。	C	・1月にも基礎力診断テストを実施する予定であり、目標が超えられるように取り組みを進めていく。 ・朝学習、基礎学力テストを引き続き行い、基礎学力の定着を図る。
	□授業改革の取組の推進 （教務）	・各教科・科目で公開授業が実施され、協同学習の授業実践・授業研究は進んでいるものの、協同学習の手法による授業改革はまだ全体のものとなっていない。	・全ての教科・科目で協同学習の授業実践が行われ、生徒の能動的な学びが行われている。	・全員で協同学習をテーマとした公開授業を行い授業改革に取り組む。 ・校内外の授業研究会、ワークショップに積極的に参加する。 ・学習指導委員会を中心として授業改革に取り組む。	・12月、2月に協同学習研究会を計画しており、これに向け全職員が公開授業を行うよう計画中である。	C	・公開授業に向け、全職員が研修の場を作るとともに、日ごろから協同学習の授業実践が行われるよう啓発につとめる。
	□成績上位者へのサポート体制の充実 （進路）	・3年生には、農業系大学を希望する生徒が1名、短期大学の希望者が4名であり、進学希望者が20数人となっている。 ・3年生は、個人指導を始めており、1，2年生については、まだ担当者が決定していない。	・3年生、進学希望者の進路希望を実現する。 ・1，2年生の進学希望者に対する継続的な学習指導体制が実現されている。	・進学特別課外等を充実させるなど上位者に対する対策を改善し、3年生を中心とした進学者への指導体制を確立する。 ・2年生へのコーディネーターを配置し、進学希望者に対する個別の指導体制を構築する。	・進学特別課外8月21，22日に実施した。また、3年生で農業系大学を目指す生徒には担当者を決め、継続した指導を行っているところ。 ・1，2年生を対象に、大学見学会を9/19鳥取大学農学部、9/21に龍谷大学農学部を見学した。(16名) ・2年生へのコーディネーターが未決定。	B	・3年生の進路実現に向けてより一層、指導を強化していく。 ・2年生へのコーディネーターが早期に決定できるように具体的な進路を確定する。その上で、担当者を決定する。
2 基本的生活習慣の確立	□挨拶指導の徹底と頭髪・服装規定を守る取組の推進 （生徒指導）	・分離礼がかなり浸透してきた。 ・8割の生徒が頭髪・服装規定を守っている。2割の生徒は毎月の服装検査後に改善をしている。	・全員が分離礼による挨拶ができる。 ・常に服装規定を守り、安定感のある生活態度で過　ごしている。服装改善の保護者への文書を昨年度17%から10%にする。	・清掃、授業、農場当番、部活動等あらゆる場面で分離礼を徹底する。 ・毎月の服装検査を実施し違反者への段階的・組織的な指導を行う。 ・日常の生徒指導情報を記録・共有し、担任、学年団、生徒指導部の連携を密し、積極的に声かけを行う。	・自発的にあいさつをする生徒が増加した。 ・分離礼は浸透しつつある。 ・4～8月五回の服装検査で18．7%の生徒へ服装改善の文書を出した。昨年の17．6%を1.1%上回った。	B	・あらゆる場面での、あいさつ、分離礼の徹底をする。 ・情報を共有し、学年団、学科、分掌の連携を深めた指導を行い、生徒の自律心の向上を図る。
	□教育相談・特別支援教育担当を中心とした組織的取組の推進 （環境保健）	・自己肯定感が低く、自己理解・他者理解の意識が低い場合、友人とのトラブルが発生することがある。 ・QUの結果において、非承認群・不満足群・要支援群に分類され、学校生活意欲が低い生徒が見られる。	・自己理解やより良い人間関係作りができるようになり、生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の割合が7月に比べ12月が上昇している。 ・QUの結果において、生徒の学校生活意欲平均得点が第1回目検査より第2回目検査が向上している。	・新入生全員面談と2，3年生の面談、職員による生徒観察をとおして、生徒の実態把握をし、より実態に即した学習支援・生活支援をする。 ・校内職員研修会を実施し、QU等を活用した教師の生徒対応のスキルアップを目指す。	・1年生全員面談を実施し、入学後の様子を観察したり、学校生活に対する意欲や要望を把握した。また、教育相談担当や教育相談員との生徒面談は必要に応じて随時実施している。 ・生徒対応スキルアップを目標とした職員研修を実施し情報の共有と支援の方向性の一致を図った。 ・第1回目のQUを6月、第2回を10月に実施した。	B	・学校生活に対する意欲や要望を把握するため、教育相談担当や教育相談員との情報を共有しながら必要な生徒の面談を継続する。 ・研修内容を活かして全職員が生徒支援を進めていく。 ・QUの結果がでしだい職員研修を行い生徒対応のスキルアップを図る。
	□明るく活発な中での規律ある寮教育の推進 （寮）	・寮生会活動が場当たり的になっている。 ・自習時間に自らの課題が見つからず、ただ教科書を眺めているだけの生徒が多い。	・委員会が生活向上に関する強化週間を企画運営する。 ・基礎学力および進路実現に向けた学力を身に着ける。	・各委員会が、今年度中ひとつ以上の強化週間を実施する。 ・ICT教材を利用し、各自の弱点に合わせた学び直しや練習問題に取り組む。 ・繰り返し学ぶ習慣を定着させ、より高い目標に向かって学力を伸ばす。	・「寮生サミット」で他校の寮生と意見交換会をし、寮生による主体的な寮運営について学んだ。寮長や委員長を中心に行事を運営しようとする機運が盛り上がってきた。 ・食堂にフリーWi-Fiを設置しICT教材の利用を開始した。学びなおしを目的に、一年生は中学校教材から始めている。	C	・アンケートで寮生の意見を聞き、取り組むべき内容を取捨選択しながら自主運営できるよう指導する。 ・ICT教材からの課題テストを作成し、学力の向上を実感させる。
3 地域連携と特色ある教育活動	□各科の特色づくりと魅力の発信 （農場）	・地域連携委員会から得られたアドバイスをもとに、関連会社や試験場等と連携し、取り組んでいる。 ・知識や技術の向上を図るため、農業改良普及所、JA、先進農家などと連携を図り、多くの知見が得られている。	・地域の産業界や教育機関等と連携し、社会で求められる地域産業の担い手としての知識・技術、意識や自覚を持った人材が育っている。 ・農業クラブ活動が活性化し、農業鑑定競技会での全国大会入賞と、農業クラブ県プロジェクト発表会において最優秀賞を受賞し、次年度の中国大会、全国大会への出場を目指している。	・鳥取県版SPH事業を確実に実施し、特色ある取り組みをその都度積極的にマスコミなどへ喧伝する。 ・農業学習はプロジェクト学習法を意識して取り組み、得られたデータを記録、数値化して科学性をより高める。 ・農業鑑定競技会に関して鑑定学習会を5月から実施し、従来より早く取り組む事によって全国大会入賞者を増やす。	・乗馬教室や農業クラブ活動での入賞をはじめ、テレビ、新聞などマスコミに取り上げられる取り組みが多く、生徒の達成感や自己肯定感につながっている。 ・より数値化をするための分析機器を購入し、プロジェクト学習のまとめに活用できる体制が整ってきた。 ・農業鑑定学習会を放課後実施し、参加する生徒は固定化しているものの着実に力をつけている。10月の全国大会での入賞を目指している。	B	・今後も継続して特色ある教育活動に取り組みながら、調査研究を中心とした学究的な取り組みもマスコミ等に喧伝し、地域農業への貢献を視野に入れたプロジェクトを推進していく。 ・次年度の農業鑑定競技会での入賞も目指して、1，2年生を中心にした学習会を開催する。
	□農業の6次産業化の取組の推進 （農場）	・高品質の米の生産や魅力ある加工食品の開発により、集客が増加し、販売額も増大している。 ・製造記録や衛生管理について改善するため、鳥取県版HACCP認定へ向けて準備を進めている。	・高食味米のブランド化が一層進むと同時に、本校で生産された農産物を原材料にした商品を複数品目開発し、色々な販売を通して特産品となっている。 ・食品製造工程が鳥取県版HACCPに認定され、さらに安心・安全な食品が生産され、生徒の衛生管理意識が高まっている。	・学科間連携によって、原材料の生産と食品加工の計画の摺り合わせを複数回おこなって商品開発を推進する。 ・HACCPの重要性を生徒に理解させ、毎日の衛生管理項目の記録をはじめ、HACCPに則った取り組みをおこなわせる。	・生物科で飼育した大山ルビー豚を原材料に食品科において、ハム、ベーコンに加工して全国農業高校収穫祭で販売する予定である。 ・ウィンナーソーセージの県版HACCP認定に向けて、保健所の指導も仰ぎながら、詳細な規定をクリアするために日々邁進している。年内の取得を目指す段階にきている。	B	・学科間の職員の意思疎通や生徒同士の連携に努め、校内6次産業化を目指した取り組みを模索しながら、新商品の開発を進める。 ・県版HACCPの取得製品の数を増やす。
	□学校からの情報発信の推進とPTA活動の活性化 （教育支援）	・学校の活動の様子を家庭、地域に情報発信しているが、十分に伝わっていないと思われる。 ・PTA活動への参加者はを一定数あると考えている（例：H29年度のPTA総会は60/252人の出席）。今後参加者を固定化させず、参加を促したい。	・HPの更新を積極的に行い、各月の行事計画の掲載、行事の様子など、本校の活動を広く校外にPRしていく。 ・PTA会員に対してメール配信サービス、配布物などをとおして積極的に行事への参加を促す。	・教育支援部が毎週1件以上の記事をWEBページに掲載する（昨年は17/118件が教育支援の掲載） ・教育支援として「まちcomiメール」を十分に活用する。	・報道機関に積極的に情報提供し取材の依頼を行った。 ・教育支援部が行ったHPの更新は26件（39%。全体では66件）であった。（昨年同時期は13件で、全体の14%。）。 ・メール配信サービスを使う頻度は少なかった。（3件） ・役員の方と、「保護者の参加促進には、直接の声かけが有効である」との確認を行った。	B	・引き続き、報道機関に積極的に情報提供し取材の依頼を行う。 ・教育支援のHPの更新は基本的に、毎週1度以上行いたい。引き続き、このペースで校内の出来事を更新することに努めたい。 ・PTA会員に対して、各行事において、メール配信サービス利用したい。

		年度当初			評価結果（中間）		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
4 進路意識の向上と進路保障	□早期からの進路意識の啓発と進路指導の充実 （進路）	・昨年度、進路決定率100%を実現した。一方、進路選択の見極めが不十分な生徒が就職に苦戦した。 ・現2，3年生にも進路希望先が未定の生徒が一定程度存在する。	・進路ガイダンス等を通して、生徒の進路意識の高揚を図り、年度末には2年生の進路希望が確定するように、進路指導を行う。 ・計画的な準備により進路を達成し、進路決定率を100%にする。	・早期の定着指導、職場開拓を実施し、進路先の開拓を進める。 ・早期の進路決定がなされるよう、引き続きガイダンス、個人面談、個別面接指導等に力を入れると同時に、進路行事、LHRなど見直しを行う。	・昨年度に引き続き、1，2年生を対象とした大学見学を実施した。9月19日鳥取大学農学部(参加16名)、9月21日龍谷大学農学部(14名)であった。		・農学部系大学進学希望者の把握ができ、実際の大学での研究や学びについて理解することができた。今後は、継続的に進学に向けた準備（農業に関するキャリアアップ、基礎学力の向上）ができるようフォローアップを行っていく。 ・進路ガイダンス等の機会を作り、進路実現に向けた取り組みを進める。
	□資格取得者増加に向けた取組の推進 （農場）	・FFJ初級、中級の合格者は、それぞれ78.4%、30.9%であり、初級、中級合わせた合格率は59.4%である。合格率80%の目標に対する達成率は74.3%である。	・FFJ検定初級、中級を合わせた合格率が80%以上である。 ・農業技術検定3級、2級の合格者（昨年：3級10名、2級1名）が昨年以上の人数である。	・FFJ検定の重要性をSHR、学科、コースなどで事あるごとに強調して受検意欲を高めるとともに、中級の受検機会を現在の1回から2回に増やす。 ・学力、意欲の高い生徒に対し、声かけなどにより農業技術検定の受検意欲を高めるとともに、事前学習会を2週間前から実施する。	・昨年に比べ実物鑑定展示が充実し、事前学習に取り組む生徒が多くみられた。 ・農業問題集を1年生に対して配布できていないので、早急に配布する必要がある。 ・農業技術検定前期の合格者は3級8名、2級は0名である。後期受験に期待したい。	B	・FFJ検定の意義をことあるごとに説明することによって生徒のモチベーションを高める努力をする。 ・農業問題集の解答に可能な限り解説を加え、「わかった感」を持たせるようにする。 ・実物展示を常設展示にし、常に学習できる環境を作る。
	□農業や地域を支える人材の育成 （農場）	・2年対象のインターンシップによって、地域社会の一員としての意識と態度が身に付くなど生徒の進路選択に役立っている。 ・スーパー農林水産業士認証カリキュラムを計画通りに遂行し、その結果、スーパー農林水産業士第1号が誕生し、鳥取大学に進学している。	・すべてのインターンシップ先が、生徒の進路希望と関連した仕事内容とマッチしている。 ・スーパー農林水産業士認証制度に関して、スーパー農業士第2号が誕生するとともに、スーパー林業士候補が存在している。 ・これらの取り組みを中学生やその保護者に知らせることによって、進路意識の高い入学希望者が増える。	・担任、進路指導部との連絡を密にすることによって進路希望を早期に把握し、インターンシップ先を農業改良普及所、商工会議所などの外部機関と連携して開拓する。 ・スーパー農林水産業士の意義を生徒に伝えて学年を跨いで希望者を増やし、就農教育プログラムを確実に実施する。また、中学校に発信する。 ・農林水産部、教育委員会と連携し、情報を地域に発信する。	・インターンシップ先は関連産業を含め本校の教育内容、進路目標と合致しているものが多い。 ・7月の就農促進研修会には1年生2名、2年生10名、3年生3名が参加した。先進農業経営者との話し合いにも積極的に参加する姿が多くみられた。 ・スーパー農林水産業士を目指している生徒は、3年生3名、2年生4名であり、認定に向けたプログラムに取り組んでいる。 ・7月に実施した中学校教員対象の学校説明会において、スーパー農林水産業士に関する説明時間を設け中学校への周知にも努めている。	B	・継続して担任、進路指導部との連絡を取り合い、外部機関（農業改良普及所、森林組合、商工会議所など）との連携を密にする。 ・就農促進研修会に参加した生徒との個別面談を実施し、就農への意欲が継続するように努める。 ・1年生のスーパー農林水産業士の候補生徒選出を目指し、各クラスでの説明会や個別面談を進める。
5 コミュニケーション能力の向上	□生徒会活動と部活動の活性化 （生徒会）	・部活動に所属している割合は96%であるが、継続して活動している生徒は約半数であり、積極的に参加している生徒と、そうでない生徒との2極化が現状である。 ・生徒会行事の運営は生徒会執行部を中心に行事運営を行うことができるようになりつつある。	・部活動が年間を通じて行われ、積極的に参加する生徒も増加している。 ・生徒会執行部が主体となり、各種生徒会行事を行うことができている。	・年4回部活動調査を行い、活動数を把握する。 ・担任、顧問と連携を密にし、退部者、未加入者への声かけを実施し、積極的な参加を促す。 ・執行部会を通じ、各生徒会行事の内容を共通理解し、生徒が主体となり、実施ができる。	・現在3回の部活調査をおこない、部活動に入っている生徒の率は95%、実働生徒も約70%であるが、部活によって実活動の差があるのが、現状である。また、担任や顧問との連携により、いったん部活をやめた生徒が他の部活へ再入部し活動する姿も見られている。 ・執行部を中心に行事の運営がなされたり、各委員会活動も活発に動いている場面が多くみられつつある。		・年末に4度目の調査を行う予定であり、実働数を把握し、更に退部者、未加入者を減らす努力を続ける。 ・倉農祭を中心とする行事において、執行部・委員会の役割を明確にし、生徒の自主的・積極的活動をさらに活発化していく。
	□人権教育の充実による相互尊重の人間関係の構築 （人権）	・自尊感情の涵養が十分でないため、他者との関係を築くのが苦手な生徒が少なくない。 ・様々な活動をとおして自己表現ならびにコミュニケーション能力を向上させる取組を行っているが、十分とは言えない。	・自らが社会的な存在であり、そのことに今まで無意識であった自らの現実と、それに伴う言動を振り返る視点を持つようになる。 ・お互いの人権を大切にしたコミュニケーション能力を身に付けている。	・様々な場面で人権を意識した行動が取れるよう、人権教育LHRをとおして、個別的視点からの具体的な人権問題の学習を行う。 ・クラスの特別活動をとおして、普遍的視点からの権利や人権の概念・意義・重要性の理解を進める。 ・「差別をしない」ということは「尊敬する」ことであることを生徒に伝え、あるべき人間関係の形を示す。 ・年度当初と年度末に生徒の人権意識アンケートを実施する。	・2、3年生は個別的視点からの人権問題に取り組むことができた。1年生は差別や偏見の概念を考えることから始めたが2学期以降は生徒自身が関わる身近な人権問題を扱う予定。 ・クラス活動を通しての人権に対する普遍的視点の獲得は、実感できる形での成果は見られない。 ・尊敬に立脚した互恵関係は上記項目と同様に数値化し難く生徒の変化は見えにくい。 ・年度当初にアンケートを実施した。年度末にも行う予定である。	C	・学園祭などの特別活動では、お互いの考えを尊重しながら自己の意見も伝えることができるような対等な関係に基づいた活動へとそれぞれの担当教員が誘導していく。 ・担任団は常にクラス内の人間関係を把握し、不適切な上下関係（いじめ等）やクラスに居場所がないなどの生徒が生じることがないような教育活動を行う。 ・アンケート結果の活用を学年と検討する。
	□幼保小中学校との連携や地域とのつながりの推進 （農場）	・様々な交流において、それぞれのニーズを把握して連携双方の満足度の高い取り組みとなっている。 ・手話学習、のうこう市場、学校農場の開放等に取り組むなど、生徒のコミュニケーション能力が向上し、良好な対人関係が築けている。	・交流事業において、企画、運営などできるだけ生徒が主体となって取り組み、コミュニケーション能力がさらに高まっている。 ・交流事業をはじめとする地域連携の成果をまとめて発表し、農業クラブ県プロジェクト発表会で最優秀賞を受賞する。	・それぞれの連携事業が終了した時に、必ず自己評価を含めた振り返りの時間を設け、次につながる方策を考える。 ・PDCAサイクルに則ってプロジェクトを進め、数値化することによって科学性を付加した取り組みにする。 ・のうこう市場、学校開放講座の参加者を増やす取り組みを行う。	・乗馬交流、花育交流、地域における販売実習など多くの地域交流プログラムがあり、それぞれの担当は日々取り組んでいるが、その振り返りが農場全体でなされているとは言えない。 ・販売実績や参加人数の把握は行っており、今後の改善策を考えるデータは取ってある。	B	・残りの学校施設の開放講座を実施し、参加者からの満足度を把握し、次年度の開放講座の改善点を見つける。 ・プロジェクト発表会に向けたまとめに早期に取りかかり、校内発表会のレベルアップをはかることで県大会での最優秀賞を目指す。

評価基準　A：十分達成（100%）　B：概ね達成（80%）　C：変化の兆し（60%）　D：まだ不十分（40%）　E：目標・方策の見直し（30%以下）